

佳作 (一般の部)

「紡ぐ」

二川 友希

柳田先生、初めまして。

私は、親に絵本を読み聞かせてもらった記憶が全くありません。一方で夫は、好きな絵本がたくさんあり、羨ましかったです。

しかし、子どもが生まれて帰省した実家で娘に読み聞かせながら、「まこちゃんのおたんじょうび」は絵のタッチが優しくて好きだったこと、「たろうのおでかけ」は色づかいや原っぱの道を思い切り走るたろうたちの解放感が好きだったことを鮮明に思い出しました。絵本の文化が我が家にもあっ

たことが嬉しかったです。

私と夫の実家の違いは、成長しても手に取れる場所に絵本があったかどうか。我が家は倉庫、夫の実家は皆の目につく場所。やはりいつも目に入る場所に絵本があるのは良いと思いました。

さて、私には五歳と二歳の娘がいます。長女は生まれた時から絵本が大好き。今も静かだなあと思ったら、黙々と絵本や本を読んでいるような子です。この絵本大賞も彼女の興味がきっかけで二人でおたよりをすることにしました。

一方次女は、一歳半頃までは毎晩の読み聞かせタイムでもチョロチョロしている子でした。しかし徐々に落ち着いて聞けるようになります。そんな次女が大好きになった本が「ちょうちよのしろちゃん」。二週間に一回図書館に行くのが習慣なのですが、

一時期、「しろ、しろ!!」と毎回のように借り、返却したがりませんでした。ちょうど春でモンシロチョウを見たばかりだったことや、ヒヨドリに襲われてドキドキするところが好きだったようですが、少し大きくなったらどんな所が気に入っていたのかを聞いてみたいです。また、大人になった時、好きだった絵本として記憶が甦ると素敵だなと思います。

そして、長女が次女に読み聞かせをしている時。表情豊かに、声色を変化させて楽しく、怖く、悲しく：読んでいることに驚きました。自分が長女に対して読んでいた、その読み方が伝わっていたことが嬉しいです。そして、長女の次女に対する優しさが伝わる口調で、いつも柔らかい気持ちになります。

彼女たちの中に、皆で絵本を読んでいたという記憶が、あたたかく、優しい形で残ってくれたら嬉しいなと思います。

子育てをしていると、毎日沢山のことを感じ、学び、時に反省します。子どもに対して素直に謝れないこともあります。そんな時、次女だけでなく、膝に乗せるには少し大きくなりすぎた長女も膝に乗せて。寝る前の絵本を読むことで少し穏やかな空気が流れます。

大きくなっても、手に取れる場所に絵本を置いて。絵本を通して、娘たちと共に過ごす時間を、大切に、丁寧に、紡いでいきたいと思っています。